

知られざる科学史のヒロイン： 国際緯度観測事業を支えた岩手の少女たち

“Hidden Figures” in Japan: Girls in Iwate behind the Success of the International Latitude Service

馬場幸栄（一橋大学）

女子の入学を認めない大学がまだ多く存在していた大正時代、岩手県水沢に在った文部省直轄の研究機関「緯度観測所」は既に若い女性たちを積極的に雇用し始めていた。大正 2 年に最初の女性職員 1 名が採用されると、その後も大正 12 年に 2 名、大正 13 年に 3 名…と続き、大正 15 年までに計 9 名の女性が採用された。昭和に入ってもその勢いは衰えず、昭和 49 年までに採用された女性の数は 100 名を超えている。

昭和 14 年に緯度観測所に就職したある女性職員の証言によると、緯度観測所における女性職員の仕事はほとんどの場合「計算係」であった。電気式計算機（コンピューター）に取って代わられるまで、国際緯度観測事業における膨大な量の計算をこなしていたのは彼女たちであった。国際緯度観測事業の表舞台に立っていたのは東京帝大や京都帝大を卒業した男性研究者たちであったが、その陰で事業を支えていたのは岩手の少女たちだったのである。ちなみに、彼女たちの多くは水沢にある女学校の卒業生だったが、尋常小学校しか卒業していないという者も少なくなかった。

それにしても、なぜ彼女たちはジェンダーや学歴の壁を越えて、帝大出身の男性研究者たちに交じって働くことができたのだろうか。それは、雇用対象を男性や高学歴者に限定しなかった緯度観測所歴代所長の功績に寄るところが多い。

初代所長・木村栄は明治 32 年から昭和 16 年まで 42 年ものあいだ所長を務め、在任中に 33 名の女性を採用した。女性職員第一号が採用された大正 2 年に所長を務めていたのも木村であるし、自ら水沢の女学校に出向いて行って講演や謡曲指導まで行っていた。第 2 代所長・川崎俊一が所長職にあったのは昭和 18 年までの 2 年間であるが、彼はその間に 4 名の女性を採用している。第 3 代所長・池田徹郎は昭和 18 年から昭和 38 年までの 21 年間に 40 名もの女性を採用した。池田は、「給仕」として雇われた尋常小学校卒の女子職員であっても採用後に計算のスキルを身につければ「計算係」として取り立てていたほか、希望する職員には男女問わず自ら数学を教えてもいた。

このように積極的に女子生徒と交流し、若い女性を雇用し、職場で働きながら必要なスキルを身につけさせることは、こんにち多くの研究所や大学に求められている。岩手の少女たちが国際緯度観測事業を陰で支えていたというこの科学史上の出来事は、それらの機関に多くの示唆を与えてくれることだろう。